

論文の内容の要旨

論文題目：「建築家・野口孫市とその作品に関する研究」

氏名：林 和久

(研究の背景と目的)

明治時代をもし前期と後期に大きく分けるとするならば、西洋文明へのパースペクティブを切り拓いた前期の人々に対して、受容した文明を当時の日本社会に相応しいように血肉化したのが後期の人々であったと考える。その明治後期において、文学や科学など様々な分野での事例が挙げられるが、建築の分野では、辰野金吾たちの第1世代に対し、「日本人である我々は何者か」という切実な問いかけを自らに課したのが建築家第2世代であったと言えよう。建築家第2世代では、伊東忠太や武田五一などが、この歴史的重要性から関心を集め研究が行われてきたが、その一人である野口については、現在まであまり研究されてこなかった。その野口孫市に光を当てたのが本研究である。

野口は、教職にあった伊東忠太や武田五一と異なり、建築論的な文章をその卒業論文以外に残していない。あくまで住友本店臨時建築部の初代技師長として実践を旨とする建築家であった。そのため野口の建築家研究に取り組むことは、自己の作品を建築論的に説明した文章がなく「住友の建築家」という特殊な立場であった点で、その研究が困難な建築家であった。しかし2014年、野口の遺族の2人に野口に関する多くの資料が残されていることが判明した。これらの資料が住友史料館に寄贈されたことを契機として、この野口孫市研究は始まっている。ただこれらの資料のなかでも、野口は建築論的な文章を残していない。従って、野口を研究する方法として、野口の建築作品や図面などからその設計意図を読み解くという方法をとった。野口に関する新資料、および作品を分析することを基礎としたという2点に、従来の数少ない野口に関する編年的記述を主とした既往研究との違いがある。本研究の目的は、「野口孫市の建築術とは何であったか」という問題設定に応えることにある。

(研究の方法)

建築家・野口孫市を研究する視座を「野口孫市の建築術」に据えた。建築術とは、「建築技術」と「建築を生み出す思考や方法」の2面から成り立っているものとする。この研究では、その両面から「野口の建築術とは何であったか」という問題設定を行った。下記の方法からその分析・考察を行っている。

1. 野口の設計による建築物の体験・調査、および復元模型製作の監修
2. 残された設計図面の分析や工事仕様書の読解
3. 野口による卒業設計や卒業論文の読解
4. 野口が残した建築的習作スケッチや断片的な日記、日本各地の風景画や野口が撮影した写真等からの野口の建築的思考の基礎の理解
5. 当時の社会的背景や技術的背景の理解
6. 既往研究の把握

(論文の構成)

本論文は、下記の序章・第1部・第2部・結章から構成されている。

序章

第1部 野口孫市の人とその時代

- 第1章 野口孫市の人物像成立の背景
- 第2章 建築家への助走
- 第3章 住友春翠と住友本店臨時建築部の創設

第2部 野口孫市の建築術

- 第4章 住友家須磨別邸 ー日本人にふさわしい洋館をー
- 第5章 中之島図書館 ー場所と幾何学ー
- 第6章 日暮別邸 ー簡素であることー
- 第7章 野口孫市の和風住宅建築

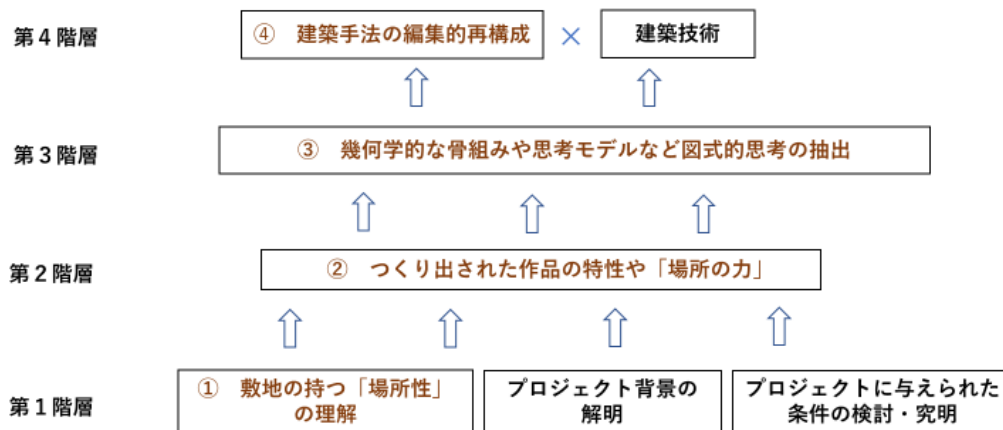
結章

「序章」では、研究の目的と方法、野口孫市研究の方法的な視座としての建築術についての定義、野口に関する既往研究との関係等を述べている。

「第1部 野口孫市の人とその時代」は、「建築術」という営為を行う主体、すなわち野口孫市という「人物」に光を当てたものである。第1章で、将来の野口の建築術を生み出す素地となった人物像の形成過程や野口が生きた環境や時代背景に培われたその生涯にわたる人物像について記述する。野口が建築家として自己に課した課題は、西洋建築をいかに日本の気候風土や日本人の生活習慣に適合させるかという点にあった。よって野口の西洋建築に対する研鑽と日本人としての素養という両面は大きな意味を持つ。第2章の中心的テーマをこの両面に設定し、特に野口が受けた建築教育と西洋建築に対する研鑽について詳述している。第3章では、住友からの招聘が無ければ野口は建築家として別の道を歩んでいたはずであることから、野口に特に強い影響を与えた住友春翠と、野口が初代技師長となった住友本店臨時建築部の創設について記述した。

「第2部 野口孫市の建築術」は、具体的に作品事例を挙げ、それぞれの作品における野口の建築術とは何であったかを分析・考察するものである。第4章では住友家須磨別邸を採り上げている。野口の卒業論文は、日本の気候と日本人の生活習慣に立脚した西洋建築のあり方を目指すものだったが、須磨別邸はその論文の内容を具体化した建築であったことを指摘した。第5章の中之島図書館については、野口が、都市的な意味と建築的な場所性を生み出すために、幾何学的な骨組みをまず組み立てていたことを分析的に抽出した。第6章の日暮別邸では、近代の本質的な課題であった「簡素であること」が、野口を建築思考の純度を上げざるを得ない状況に追い込んでいたことを明らかにした。第7章では、野口による和風建築を採り上げ分析することによって、野口の建築術の特質が和風建築でも同様に現れていたことを明らかにした。

この野口孫市研究の結章では、その建築術の全体像を理解するために、第4章から第7章までの全プロジェクトを見渡し、全設計プロセスを4つの階層に分解したモデルを作成し、そこから野口孫市の建築術の特質を抽出しようとした。



野口孫市の建築術の全体像を把握するための設計プロセスからのモデル

この設計プロセスモデルのなかで、野口がその設計する建築の本来の目的としたのは、第2階層の「② つくり出された作品の特性や場所の力」にあったのではないかと考える。その手段として、第3階層・第4階層があり、その基礎として第1階層があった。この研究で明らかにしようとしたのは野口の建築術の在りようだが、なかでも第2階層の「場所の意味の創出」に野口の主眼があったと考える。「場所の意味の創出」こそ、実践的建築家に最も要求されることだったはずだからである。

第1階層のその建築が成立した条件を理解することは、この研究では必須のことであった。建築は、成立する「場」があってはじめて成り立つものだからである。②で構想された「場所の意味」を建築として具体的につくり出すために、野口はすぐに既存の建築様式を当てはめたのではなく、また当時の建築技術をすぐに応用したのでもなく、その前に第3階層があったことに、野口の建築術の特徴があった。本研究では、それぞれのプロジェクトにおいて、野口が幾何学的な骨組みなど図式的思考を組立てていたことを分析的に抽出した。

野口は、その骨組みのうえに第4階層の建築様式的な手法を取捨選択し、自在に再構成していたのである。またその様式技法や建築装飾は、野口の西洋建築についての習熟力を背景にディテールに至るまで綿密に組み立てられ、構造技法や工事仕様などについては、当時の建築の先端技術を使って設計され建設されていた。

結章では、「野口孫市の建築術」の特徴として次の3点を挙げた。

（「使い手」の視点から「経験の器」としての建築をつくる）

「野口の建築術が何であったのか」という問題設定に対し、このプロセスモデルが示す全過程から、野口がそれぞれの段階で「その建築を体験する人々にとってどうあるべきか」と考えていたことの総体が野口の建築術であったことを明らかにした。「野口孫市の建築術」とは、「人々の良き経験のための器」としての建築をつくり出すことであり、建築の持つ意味や価値の全体性を実現しようとするのであった。野口は、住友本店臨時建築部の技師長として、あくまで実践に生きた建築家だったのである。

（野口の多元的な思考）

一般的に建築家について言えることは、その年齢を経るに従って作風に変化がみられることである。しかし野口の場合、須磨別邸・中之島図書館・日暮別邸の竣工年はそれぞれ明治36年・明治37年・明治39年であり、同時期に様々な作風を見せていたことに特徴があった。また、野口の建築術の設計プロセスを考察する試みを行ったが、そこから見えてきたのは、西洋建築や日本建築の規範にとらわれない自由で多元的な思考法であった。図書館に古代ローマのパンテオンを組み込み、ヴィクトリアン・コロニアル様式の洋館に日本の建築手法を忍び込ませる自在さには、多元的で自由な建築的思考を見ることができる。また第3階層の幾何学の選択においても、全く異なる幾何学をそれぞれのプロジェクトにふさわしいように自在に選択していた。第4階層の建築手法の編集的再構成においても、野口が学習した膨大な西洋建築手法や、慣れ親しんだ日本建築手法のなかから、自在に切り札のカードを繰り出すように設計していたのである。

（「西洋」と「日本」）

野口の建築は、西洋建築の習熟事例として語られることが多いが、「西洋」と「日本」の葛藤の中から生まれてきたものであった。明治後期とは、西洋文明が根を張り日本人のなかに受胎して独自の成長を始める特徴的な時代であったとすることができる。日本の近代建築史を研究する意義は、当時の日本人建築家たちが西洋文明を咀嚼し内面化して更に独自の展開を見せることになった歴史に光を当てることにある。この野口に見られる建築において内面化が起きたことは、現代の日本の建築の独自性が培養されたことにも繋がっていると考える。野口は、西洋建築を咀嚼し内面化するために264点に及ぶ西洋建築の透写習作を残していた。またもう一方の「日本」について野口が、日本各地の風景画をはじめ鉛筆画などのスケッチ等に日本で「造り」と呼ばれてきたものに対する強い関心を示していたことを見ることができる。

野口の没後、住友本店臨時建築部の技師長は日高胖に引き継がれた。住友本店臨時建築部の伝統は、その後の大恐慌や第2次世界大戦といった時代の荒波に揉まれながらその名前を様々に変えながらも、日本の近代化の歩みとともに、現在の日建設計に引き継がれている。「野口孫市の建築術」は、「Experience, Integrated」という「経験の器としての建築や都市を豊かにデザインする」という現在の日建設計の理念のなかに息づいているのである。